

書評から読み解くベトナムの農村研究者の「半農半 X」への視点

筒井一伸*・グエン ティ フェン**・フィン ティ アイン フォン***・
ホアン ズン ハー****・チャン ティ トウエン*****・グエン ヴァン チュン****・
グエン スアン ホン***・ブイ ティ トウ*****・ド ティ ヴィエット フォン*****

The Perspectives on “Half-Farming, Half-X” from Reviews of Vietnamese rural researchers

TSUTSUI Kazunobu*, Nguyễn Thị Huyền**, Huỳnh Thị Ánh Phương***,
Hoàng Dũng Hà****, Trần Thị Tuyền*****, Nguyễn Văn Chung****,
Nguyễn Xuân Hồng***, Bùi Thị Thu*****, Đỗ Thị Việt Hương*****

キーワード：田園回帰，「半農半 X」，農村，田園，ベトナム

Key Words: Return to rural living, "Half-Farming, Half-X", rural areas, countryside, Vietnam

1. 海外に広がる「半農半 X」

2003年、『半農半 X という生き方』（ソニー・マガジンズ刊）が出版された。1999年に京都府綾部市に U ターンした塩見直紀氏が提唱した「半農半 X」は、「半自給的な農業」と「やりたい仕事」を両立させるライフスタイルであり、今日の日本では広く共感を得て、政策にも取り入れられている^{注1)}。半農半 X が田園回帰時代の若者を中心に支持されているのは、単なる兼業農家ではなく、個々人が社会に積極的に関わることでできる天職としての「X」探しを提案しているためでもある。本書は文庫本（図 1）にもなり、また中国や台湾、韓国、そしてベトナムでも現地語に翻訳の上、出版されている。

一方、ベトナム農村は 2008 年の共産党中央委員会総会決議第 26 号（農業・農民・農村地域に関する決議）に基づき、2009 年から「新農村建設」が始動している。神田（2015）によると新農村建設運動では職業訓練や農業技術普及を通して潜在的な失業可能性人口を新しい工業化施策のなかで雇用労働力としての吸収する一方、農村に定着させるための地域経済活性化に加えて生活環境整備が行われている。このようにかつての日本の農村が経験した社会経済的な「活性化」が主流であるベトナム農村を研究する、ベトナム人研究者はどのようにこの半農半 X を受け

止めるのか？そのような素朴な疑問がふと湧いてきた。ベトナム学術界では書評は一般的とはいえず、本書の学術的書評は皆無であった。

日本国内での半農半 X の論評としては、農村で半農半 X のライフスタイルを始めた若い世代による農村コミュニティへの影響が地域づくりにおいてどのような意義があるのか学術的議論の活性化を期待する小林（2004）や農業は単なる経済の問題ではなく社会的共通資本としての意味を議論する社会理論と半農半 X を評価する濱田（2007）、新しい形の兼業農業として小規模な農地利用を期待する稲垣（2023）などがある。当然のことながらこれらの書評は日本国内の農村の実態を踏まえたものとなっており、ベトナムでの半農半 X のローカルな地域での受け止め方を知るためには、ベトナム農村の実態を熟知した研究者の視点が大切である。

そこで筆者^{注2)}の一人である筒井が 2022 年度と 2023 年度にベトナム中部のフエ大学傘下の科学大学に滞在して実施した「過疎発現下のモンsoonアジア農村におけるネオ内発的発展の可能性」の研究活動の一環として、2022 年に刊行されたベトナム語翻訳版“Sống Bán Nông Bán X - Triết lý mới về Cuộc sống điền viên”（Nhà Xuất Bản Dân Trí 刊）（図 2）の書評をベトナム人の農村研究者に依頼した。

*鳥取大学地域学部地域創造コース，**クイニン大学自然科学学部，***フエ大学・科学大学社会学ソーシャルワーク学部，****フエ大学・農林大学農業普及農村開発学部，*****ヴィン大学師範校地理学部，*****フエ大学・科学大学地理地質学部



図1 『半農半Xという生き方』の書影
(塩見直紀氏より許可を得て転載)

注：本書影は文庫本として2014年に再版された際のものである。



図2 “Sống Bán Nông Bán X”の書影
(塩見直紀氏より許可を得て転載)

なお、その遠因として2023年5月21日に京都府綾部市で開催されたスローライフ・フォーラム in 綾部において、筒井が旧知の塩見直紀氏とともにコーディネーターを担当した際に、雑談の中で塩見直紀氏からベトナム語版半農半Xの反応を知りたいと話されていたこともある。

本稿ではまず書評を紹介する。その上でWeb上で

のベトナム語による半農半Xの記事なども参照しつつ、ベトナム人の農村研究者の半農半Xへの視点を整理することを目的とする。

なお書評を紹介したII章の1はグエン ティ フェン、2はフィン ティ アイン フォン、3はホアン ズン ハー、4はチャン ティ トゥエン、5はグエン ヴァン チュン、6はグエン スアン ホンがそれぞれ担当し、筒井がベトナム語から日本語に翻訳(意識)した。それ以外の章は筒井、ブイ ティ トウ及びド ティ ヴィエット フォンが担当した。

II. 書評 “Sống bán nông bán X”

1. 農業体験を子供たちの教育に

筆者は「田園回帰(Bò phò về quê)」現象^{注3)}の調査のために本書を手を取った。本書は6つの章で構成されており、各章は人間再生の場所、田舎での暮らしの喜び、やりたいことをみつけることなどが紹介されていた。本書を閉じたとき、筆者自身の「X」をみつけるという今後の人生目標ができたように感じた。本書は多くのものが“劣化”していく時代において、私たちがどのような人生を目指すのかを知ること役立つ。

私たちは日々、汚染された環境などに常にさらされており、心身の健康に深刻な影響を与えつつある。根源的には、単なる農産物の販売のみを目的とするのではなく、「農的な暮らし」が将来の世代にとっても必要なものである。また農村で半自給的な農業と並行して、やりたい仕事を行うことは小規模で持続可能な生計(半農半X的生活)を営むと同時に、自らの個性や特技をアピールすることで社会に何かを貢献することになる。半農半X的生活から、私たちは自分たちの生活のための生計を立てることと、社会に役立つ好きなこと(半X)の両方を行うことができる。すなわち自分のX(ミッション)をみつけて、エコロジーな農的生活をベースに自分のやりがいと天職をみつけるライフスタイルといえる。

困難は山ほどあるだろうが、半農半Xは、新たな視点で捉えた21世紀の生き方である。なぜなら、Xは自己と社会の調和であり、Xは、個人が社会とポジティブにつながることを意味する。個人と社会との調和は、新しい幸せな生き方の本質であり、才能を開花させる社会である。

塩見直紀氏は自分と家族の話交えて、半農半Xが、物欲を最小限に抑え、健康的な生き方であることを示す。「食べるものがある」という小規模な自給自足的生活は、収入は少ないが、精神的な満足を高

める。塩見直紀氏が記したエコの観点から、自分が買うものは家族の暮らし方に反していないか、本当に意味があるのか、他人の真似をしているだけではないのか、この商品は価値のあるものなのか、などを常に考えて「必要なものだけを揃える」という考え方を教えてくれる。半農半Xは、ものに溢れた生活ではなく、大きな夢である絆の強い家族を築く方法も示す。

半農半Xは、農作業には協力する喜びがあることなどを教えてくれるため、地域コミュニティとともに生きる方法も示している。半農半Xは畑が生物多様性の高い生態系であり、「畑は鳥と昆虫のレストラン」であることを理解させる。また農業は家族それぞれの役割を示す人間教育の場でもあり、三世代が協力して農業を通じて「命」と「物質」を再生産する場所が家族であるとする。

幸福の尺度がお金から時間に移りつつある「沖縄移住現象」、ブータンのような「人を大切に作る国是を持つ小国」、7世代後の子孫に責任を負う「北米インディアンの哲学」、理想の生き方をみつめる「バリ島社会」などが示したように、万物の関係を修復することが半農半Xの真価である。ライフスタイルの最も重要な基礎は、自分を守るための知恵（半農）と働くための知恵（半X）を持つことである。そして半農半Xの目標は、多くの人々とともにそれぞれのXを見つけること、つまり自分のやりたいことをみつけ、それを世界に伝えることにある。言い換えれば「自分が主人公の人生を創る」ことに他ならない。したがって、最も重要なことは、自分が本当にやりたいことをみつけて、自分のできる範囲で何かを始めることであり、本当の幸福は、楽しむことと、少数の選ばれた人々との友情を育むことから始まる。社会に貢献するという使命を遂行するには、自分の強みを知ることが重要である。

半農半Xは時間をゆっくり使うということ、つまり心を豊かにする生き方であり、40歳^{注4)}からは人生をカウントダウンとして捉えるということである。半農半Xでは、個々人の「意志+農工商」が生き方そのものである。将来に渡ってXを創っていくためには経験知、伝統、文化を伝えることが大切であり、そのためには農業体験を子どもたちの教育に取り入れていくことも一つの方法であろう。

2. 環境・福祉とシェア

最初は半農半Xという人生哲学を単純に理解していた。しかし本書全329ページを何度も読むと、このライフスタイルを取り組み、実践し、体験すると

きの、各個人、各家族のそれぞれのストーリーを感じることができる。

半農半Xの意味は、「小さななりわいを実践し、小さな農業をして自分の十分な食料を稼ぎ、好きなこと、やりたいこと、達成すべきことを通して社会に積極的に貢献すること（Shiomi, 2022, p.12）」である。著者はそれを「X」と呼んでいる。私たち一人ひとりが得意なこと、やりたいこと、できることがXである。著者によれば、「半農半Xの真価は、万物の相関関係を回復することにある」（Shiomi, 2022, p.179）という。本書を通じて農業とは、個人や家族の基本的かつ不可欠なニーズを提供することであり、単に食料を栽培したりすることだけではないことがわかる。また農業には官能的で自然という意味も含まれており、人間の価値観や万物や自然に対する個人の責任を育むのに役立つ。そこから自分自身のX、つまり私たちが住んでいる世界に対する自分自身の使命を明確に理解することができる。しかしこのことは単純でも容易でもない。本書で紹介されているストーリーは、ライフサイクルのさまざまな時点で自分のXを発見した経験を示している。著者の塩見直紀氏のように30歳から40歳でみつける人もいれば、志賀政枝さんや芝原キヌ枝さんのように70歳から80歳でみつける人もいる。

まずもって筆者は著者の「半X」という哲学に感銘を受けた。「自分の好きなこと、やりたいことが、誰かの役に立ち、お互いが幸せになれる、役に立つ生き方（Shiomi, 2022, p.12）」が望ましく、「個人と社会が調和し、より良い未来（Shiomi, 2022, p.13）」へ進んでいく。この実践から何が残せるのだろうか。お金だろうか？仕事だろうか？キャリアだろうか？それとも理想だろうか？私たちが子供たちの世代に何を残すべきか、将来の世代に何を残すべきか、という問題は、現在、特に昨今の不安定な世界において、私たち一人ひとりが考え、直視すべきものである。著者は、筆者を含め、本書を読んだ多くの読者の心の奥底にある願望や不安を呼び起こすことに成功している。

第二に著者は半農半Xという哲学の中で、「農（nông）」という言葉に日本語の「里山」を充てている。Kilala Magazine^{注5)}によると、里山は「里（村）」という言葉と「山」という言葉を組み合わせたものである。つまり日本人は、里山というと、田園風景、自然の中で生活し、自然と共生し、自分たちで食べ物を育てることを実践してきた国民であり、筆者はベトナム北西部の溪谷にある山村のような風景を思い浮かべる。英語ではSATOYAMAという用語を単

に田舎の意味で捉えるきらいがあるが、世界では食料とエネルギーが不足する一方、里山は日本人の深層において脈々と受け継がれている伝統的で持続可能な価値観と考えられる。したがって「半農」という言葉は、ライフスタイルであり「自然を尊重し、自然とともに生き、伝統的な人間の良き価値観を呼び起こす生き方」という著者塩見直紀氏の人生哲学として理解されるべきである。おそらくこの時代、人々が目指すものは単に経済的、物質的な価値観ではなく、「人間の心はますます自然を志向するようになっていく」(Shiomi, 2022, p.135) という人道的な価値観なのかもしれない。農作業を通してのみ、私たちは万物の循環を深く感じ、生命を育むことを意識し、永遠の自然と生命を対比させて万物を哀れむことができる (Shiomi, 2022, pp.179-180)。それを通して、私たちは良い心を育む方法を学び、自然と私たちの周りのすべてのものを守る方法を学ぶ。特に世界が環境悪化、気候変動、感染症などの多くの問題に直面している現状において価値あることである。

「与えること」は「与えて与える」、「与えて忘れる」ことであるというイデオロギーとともに、今日の世代の美しく意味のある文化的特徴になりつつある (Shiomi, 2022, p.161)。資源と命が有限であることを認識し、私たちは「夢を共有し、希望を共有し、さらには悲しみを共有し、希望に満ちた世紀と一緒に作りたいという願望を表現する」必要がある (Shiomi, 2022, p.160)。「シェア」という言葉は、環境と福祉の架け橋となるキーワードでもある。それは、手を携えて私たちが築いてきた社会を未来の世代に繋ぐことができる思想である。私たちが今日住んでいる世界は、現在および将来の世代にとって多くの課題とリスクに直面している。したがって、各人の X の実践を通じて「与えて分かち合う文化」をつくるという著者の考えは、コミュニティや環境にとって有益であり、将来の世代にポジティブなものをもたらすことができる。

著者が本書で掲げた「多くの人々とともに X をみつけ、その生き方を世界に伝える」(Shiomi, 2022, p.212) という目標は様々なレベルで達成できている。筆者はツインビーンズファーム (Twin Beans farm) の若者たちのウェブ記事^{注6)}を目にしたが、塩見直紀氏の半農半 X というライフスタイルの思想は彼ら若者たちのツインビーンズファームが追及するものとされていた。それは「離都向森 (Bó phó về rừng)」^{注7)}を目指す専業農家ではなく、あくまでも兼業農家である。一日の半分は自分の才能、情熱、人生の目標のために活用し、「この人生で私たちは何者で、

どこから来たのか? この人生は何のためにあるのか?」という大きな問いに対する答えをみつけることに費やす。

筆者個人としては、社会科学分野の教育者、研究者として、地域社会、自身の周囲の人々のために、今日だけでなく将来のためにも役立つことを追求してきた。本書の読了ののち、家族や地域社会にとって良い価値観を実現するために、自身の X をみつけて実践するとともに、学生向けの講義や研究上のシェアセッションを通じて、著者塩見直紀氏の主張する人生哲学である半農半 X を広めていきたい。

3. ベトナムでの適用可能性

本書は日本の農村での生活と、そこに住む人々が社会と経済の変化という課題にどのように直面してきたか興味深い視点で示している。土地所有が負担になり、空き地が増える時代において、著者は「所有価値」から「使用価値」への移行を強調する。本書の読者に、自身の生活のための資源、金銭、物資の必要性について疑問を抱くよう促す。

さらに本書では、商業規模と比較した自給率とその見直しについても説明し、2つのシステム間で移行する際に一部の農家が直面する課題についても取りあげる。本書は、日本の農村の生活を詳しく紹介するだけでなく、読者に今日の状況において自然と農村生活の価値について考えることも促す。

本書は半農と半 X という2つの要素を組み合わせたユニークなタイトルで、好奇心と興奮を生み出す。半農は農村生活と農業に関連する明確な概念であるが、半 X は経済的な意味での「販売」から「物々交換」まで幅広く指し示す。このタイトルは好奇心を刺激するとともに、農村生活の変化についての著者塩見直紀氏の新しい哲学としても理解できる。表紙も読者に深い印象を与え、日本人とベトナム人、農業と「X」の調和のとれた統合のイメージは、非常に創造的である。

本書はシンプルな田舎暮らしを目指すという明確なメッセージを伝えるが、他方で「X」を無視することなく「小さななりわいが崇高な使命」という意義を、田舎暮らしに巧みに組み込んでいる。つまり田舎暮らしに変化と創造性を求める。本書は読者、特に外国人が、日本農村住民が現代にどのように適応し、社会的、経済的課題に対する新たな解決策を生み出すことができるかを理解するのに役立つ。

著者は綾部の里山での物語を通して、シンプルな生活と自然との親密さの意味を表現する。特に在来種の植物の保存や畑の生物多様性の維持など、農業

生産活動における環境保護や自然とのバランスの大切さを述べた「畑は鳥と昆虫のレストラン」というメッセージが印象的である。これらは読者が人生の真の価値と、自身の周囲環境やコミュニティの維持にどのように貢献できるかを考えるきっかけとなる。

本書の文体は全体的に親しみやすく、理解しやすく、著者は一貫性のある魅力的な言い回しを使用している。それは本書全体の雰囲気を作り出し、読者の感情の面でも印象的な影響を与える。

本書の適切な対象者を筆者なりに考えると、田舎暮らしや農村文化に興味がある人は人生の課題と機会についてより深く理解するであろうし、環境保護に興味がある人にとっても、本書は田舎暮らしと環境の関係を示しているのも魅力的であろう。また哲学とシンプルライフについて学びたい読者が、人生と哲学の個人的な研究について議論するのもよい。

ベトナムでの半農半Xの適用可能性を考えると本書の見解と哲学は、ベトナムの「田園回帰 (Bồ phó về quê)」という社会傾向の文脈にも適用できる。特にベトナムの若者に対する、田舎暮らしや人生へのアプローチの変化に関する哲学やメッセージが含まれている。以下は、本書が都市生活の喧騒から逃れ、環境がよく平穏な農村に戻りたいと願う人たちに適用できる知識と教訓である。

まず、田舎暮らしについて理解を深めていく必要がある。本書は読者、特に若者が田舎暮らしと、それがもたらす課題と機会をより深く理解する上で有用である。これは「田園回帰 (Bồ phó về quê)」を決意する際、特に地元に戻って暮らしていく際の初期段階での課題に対して、精神的な準備を促す。農村の人々の自然環境や生産、文化、心理を理解することも、地域に溶け込んだライフスタイルを構築する上で極めて重要である。

次に、シンプルライフの哲学とその重要性を理解することである。この哲学はベトナムの若者に、都会の複雑なライフスタイルに従うことなく田舎で住みやすい生活を送る方法についての新しい視点を提供する。「都会を出て田舎に帰りたい」という人は、それが「やりたいこと」なのか「やるべきこと」なのかを深く自覚し、明確に区別する必要がある。

第三に、常に創造的な思考と前向きな変化を人生にもたらす。これは、若い読者が農村発展に貢献し、そこでの生活をより魅力的なものにするための新しい方法を模索することを奨励するための基礎である。文化的価値やヴァナキュラーな知識に基づいて、農業、畜産、観光などの農業に関連するなりわいの革新に特に関わる。

第四に、農村の環境保護の重要性と農村生活が半農半Xの目標に貢献できることを強調し、ふるさただけでなくベトナムの農村や山岳地帯全般においても、若者が環境保護活動に参加するよう促すことができるだろう。

4. ゲアン省の里山と半農半X

今日、世界各国では「田園回帰 (Bồ phó về quê)」傾向が強まっている。塩見直紀氏が1990年代半ばに始めた「半日農家」の生活の中で、著書『半農半農Xという生き方』が誕生した。この本は中国語に翻訳され、2006年に翻訳が台湾で出版され、現在12版を重ねている。世界的な書籍販売サイトAmazonの統計によると本書は80位にランクされている。これはおそらく様々な理由から多くの人々の関心をひいていることを示している。筆者にとっても本書は個人的な価値のみならず、学術的な意義も高いと考える。

塩見直紀氏は「誰もが生涯のキャリアを持っている」と述べているが、誰もが最初からそれを見つけられるわけではない。場合によっては、本当に好きな仕事は、時間とお金のプレッシャーから解放されて初めて得られる。小さな生計を立てるためのライフスタイルは、やがて豊かになり、自分自身の核となる価値観を変えるためのセーフティーネットとなる。半分の時間を農業に費やし、残りの半日は自分が好きなXの仕事をする。Xは得意なこと、やりたいこと、できることであり、それによって多くの人と共鳴する価値を生み出す。映画を翻訳できる人は、米を作り、村の子供たちに英語教室を開く。あるいは、画家やアーティストは、手工芸品を作ったりしながら、羊を育てたりする。半農半Xは、人間生活における2つのニーズ、つまり食料を手に入れることと有意義な生活を送ることを満たすことができる。人々は「半日農家」を通じて、持続可能な農業、食料の自立の本当の意味に立ち返り、一方、残りの半日を利用して、自分の才能、個性、強み、スキルを活用した自分自身とコミュニティに価値創造とともに、生活に必要な収入が得られる。

著者は、農業を営む過程で自身のXが見つかるという。本書を読むと、農業をするために田舎に帰る必要もなければ、広い土地を持っている必要もないことがわかる。都会の中でも、いつでも誰でも半農を始めることができる。バルコニーやテラス、または市民農園など、移動時間が少ないので半日や週末に農業を行うことができる。1つの種を植え始め、自然に一步近づき始めれば、規模や時間は関係ない。重要なことは、農業を通じて、私たちは自然界の法

則を尊重し、学び、従い、調和して生きることを学ぶことである。

塩見直紀氏の物語と実体験は、現代の若者が都市を離れて田舎に戻る傾向がある多くの理由を説明している。農業を始めてからXを発見する人もいるが、Xを決めてから就農する人もいる。それはごく自然なことである。なぜなら、結局のところ、半農半Xは人生の方程式であり、各人が独自の答えをみつけるものだからである。

現在、ベトナムでも半農半Xに近いライフスタイルが注目されている。筆者の友人や学生も農業をしたり、Xといえる時間を過ごしたりしている。卒業生は都市を離れて農業と武術を教えるために農村に住んでおり、筆者の高校の同級生は中小企業と兼業として農業に従事しており、実際に半農的な仕事をしている。しかし農業をする上で孤独や困難を感じている人もいる。筆者が本書からのヒントとして友人に伝えたいのは「ないものに固執するのではなく、すでにあるものを探してそれを活かすこと」である。身近な人間にはそれがみえていないため、部外者(ランダムな人々)の目を使って、その地域の資源や、その人々自身が暮らす生活、文化生活の価値や意味を掘り起こす「地元学(Địa nguyên học)」というアプローチが考えられる。その地域にすむ人々はその資源を使って土地を拓く。地元学は存在しないものに固執するのではなく、利用可能なものを探すことで、地元で「何もない」と不平を言ったり、都市を羨んだりしないようにと人々に説く。

筆者は5年前に日本人の地域づくりの実践メンバーを通じて「里山」を知った。本書を読んだ後、ゲアン省の山間地域に里山モデルを作れないかという夢がさらに膨らんだ。豊かな資源と美しい景観に恵まれたゲアン省の山間地域には文化的多様性、豊かなアイデンティティ、知識と経験という「3つの強み」がある。筆者はゲアン省西部の山間地域に地域の特色を生かした「里山の暮らし」のモデルを構築する地域づくりを目指している。人々の自然志向が強まる時代において、筆者ら地理学者は地域資源の再発見と評価を行い、「知識と知性」を「生きた知識と情報」、「ソフトな価値観」へと発展させていく必要がある。さらに価値をデジタル化して広め、将来の世代に引き継ぐことも必要だ。

5. 批判的議論のポイント

半農半Xという牧歌的な生活の新しい哲学を通じて、読者には次のようないくつかの議論のポイントを提供される。

この哲学は、革新的な考え方であり、自給自足はできないが小さな家計を維持するための安定した収入源と、それを補う他の収入源を持つ人々に適したものである。ベトナムにおける少数民族や、貧困層、教育を十分に受けられていない人々など、多くの課題を抱えるコミュニティにとっては、農業生産と農産物の販売に時間と労力を多く費やさざるを得ず、またそれが唯一のなりわいである。すなわち、日々の食料の確保や最低限の収入を心配しなければならぬ(少なくともは)コミュニティの実態にとって、Xをビジネスとして形成して発展させるという半農半Xという考えとは、まだ大きなギャップがある。

またこの哲学は日本で形成され、適用されてきたものであり、本書では国民の特性、自然条件、経済的条件、社会的条件について具体的に言及していないため、誰がどのようにベトナムにおいて半農半Xの理念を形成させ、発展させていくのか疑問である。なぜなら、地域によって半農だけではなく「半X」が生まれるという変化に対する考え方の違いが生じる可能性があるためである。筆者の疑問として、確かに綾部市では半農半Xという哲学を持った人材が生まれてきているが、日本の他の地域での半農半Xという哲学の普及は、綾部市と同様なのか異なるのか、といったものがある。

加えて国家的あるいは世界的な食料安全保障の観点からみた場合、この哲学の広がりには多くの課題が生じると思われる。個々人は自給自足と、好む活動をすることで様々な価値観を生み出すことができるが、自然災害や戦争、感染症の広がりなどが発生すると食料安全保障の問題が憂慮すべきものになる。なぜなら自身や家族が十分に食料を得る条件がどこにでもあるわけではない。確かに半農半Xを実践する人々は自給自足の能力があるかもしれないが、日常的な食料の生産が人類の大多数のニーズを満たすのに十分ではない場合、どうなるのであろうか。

半農半Xは社会問題を解決し、自身の天職に忠実に生きるという人生哲学をもたらした。本書は多くの人生哲学を実現し、独自の哲学を構築してきた著者の意志、精神、ビジョンが示されている。読者は本書を通じて、著者が自然、人々、そして著者が住んでいる地域社会の文化に対して計り知れない愛を持っている人物であることを明確に感じ取ることができる。著者は人と人、人と自然の間を繋ぐ役割を担っていることを示したが、これが「なりわいと天職」についての本書の大きなメッセージである。

6. 新しい牧歌的生活の哲学

本書を読み終えたときの一つの目の筆者の疑問は半農半Xとは論文であり理論なのか、それとも現在から未来に向けた生き方であり行動なのかということである。もし理論／論文であれば、なぜグランドセオリーを使わずに、これほど具体的に、詳細に、でもシンプルでわかりやすい方法で提示できたのであろうか。非常に驚くべきことであり、また非常に効果的といえる。もし生き方／人生の行動である場合、本書は過去→現在→未来という3つの発展のすべての側面を持ち、常に達成すべきもの、つまり未来の人生を最善の方向に人々を導くものなのであろうか。筆者個人の理解としては、半農半Xは一つの理論であり、その理論は非常に説得力のある生きた行動によって裏付けされているものである。

二つ目の疑問は、この理論を世界中のすべての階級、民族、国に適用するのは時期尚早ではないかということである。行動の前には常に理論が必要であるが、現実には多種多様な個人、階級、国家が存在する。また、多くの課題、例えば貧困、感染症、戦争、経済状況、インフラの欠如／脆弱などを抱えている。しかしながら進化の法則は継続的な発展であり、そのステージの違いである。先進国だけでなく途上国でも半農半Xのプロセスを実行する必要かつ十分な条件が本書では示されている。

三つ目の疑問は国家と人類の高齢化は抗しがたい傾向であり、著者もこの問題を提起し、議論しているが、脆弱な状況に半農半Xが適していない可能性もある。

最後に筆者なりに本書を読む際の注意点を挙げたい。まず理論的側面では非常に具体的で鮮やかかつ深遠な分析と実証を通じて、概念と概念の関係クリアに説明されている。しかし内容的には半農半Xという理論に収斂させているため、読者は深く研究し、調査し、解読する必要がある。なお著者は半農半Xの理論の困難さを軽減する基盤は、人間を中心とした個人の役割、自我、意識であるとするが、この点については、著者はさらに精査する必要がある。人類の将来のために、自然科学、応用科学、社会科学の境界線を超越する研究者が増えることを祈りたい。

III. ベトナムでの「半農半X」への視点

—まともにかえて—

以上、農村研究を行う6人のベトナム人研究者の書評を概観したが、大きく分けると、半農半Xの考え方を素直に受け止めて教育や環境、福祉といった

課題に結び付ける論評(1と2=タイプA)、「田園回帰(Bỏ phố về quê)」といった都市から農村への移住の増加という現実を重ね合わせて、農村でのライフスタイルの具体的なモデルの一つとして位置付けようとする論評(3と4=タイプB)、およびマクロスケールとの不適合性や地域特性などとの関係性への異議、さらに半農半Xはアカデミックな理論なのかそれとも人生論なのかという疑義といった批判的論評(5と6=タイプC)の3つに分類される。その中でもタイプCの5で言及された「国民の特性、自然条件、経済的条件、社会的条件について具体的に言及していないため、誰がどのようにベトナムにおいて半農半Xの理念を形成させ、発展させていくのだろうか」という素直な疑問は直視すべきであろう。

ベトナム農村を政策的にみると、2009年からの「新農村建設」では地域経済活性化に加えて生活環境整備が行われている。しかし筒井ほか(2020)でも指摘した通り、ハード面のインフラ投資が優先され生産活動に関わる投資が低調であることから、ベトナム農村の地域づくり主体としての地域住民の「参加」の意義と可能性を意識した「新農村」の捉え方が求められる。

一方社会的には、特にCOVID-19パンデミックを契機に「田園回帰」の傾向がベトナムにおいても進んできた。この傾向は価値観の変化を反映しており、かつては成功の頂点とみなされていた都市生活が、特に若い世代によって再考されている。田舎暮らしは高く評価され、この傾向は関心と呼び、関連記事やFacebookグループ「Bỏ phố về rừng (離都向森)」などのオンラインコミュニティの増加がみられる。このグループは10か月で1万7千人以上のメンバーを獲得し、その多くが農地を購入して経験を共有しようとしている。この現象は人々の考え方や価値観が徐々に変化していることを反映している。

また、ベトナム発刊されている電子新聞をデータソースとした筆者ら分析によると、「田園回帰」に関する記事は2015年頃から掲載され始めており、1年4か月(2022年1月から2023年4月)に掲載された「田園回帰」関連記事は、8年間(2015年から2023年)の記事総数の約50%を占めており、その関心の急速な高まりが読み取れる(Tsutsui et al., 2024)。

これらベトナム農村における「田園回帰」という社会的潮流は、半農半Xの受容の基礎ともなりつつある。実際にインターネット上には半農半Xに関するベトナム語による反応も散見されるようになっていく。例えば、「Sống bán nông bán X”: Xu hướng mới của thế giới hiện đại? (「半農半X」: 現代世界の新たな

なトレンド?)^{注8)}では、都市から森のある農村への移住傾向を「Bỏ phố về rừng (離都向森)」としてベトナムでは捉えられており、同名の Facebook グループには20万7千人の会員が集まっていることを踏まえて、半農半 X を通して田舎暮らしに対して、創造的なインスピレーションを得るのに役立つ、「退職後の生活をどうするか?」、「心を養う生き方とは何か?」、「農業体験を子どもたちの教育に取り入れるには?」、といった現代社会の多くの問題を解決するのに役立つとする。

また、パンデミックの後に自然に近づくことに注目をしはじめ、心と体に持続可能なグリーンライフスタイルを目指す人々の情報サイトでは、「半農」生活を始めるとシンプルで小さなことに絞り込まれるため「経済的収入が減り、精神的収入が増える」ことになるかもしれないが、それこそが、人とコミュニティ、人と自然の間の調和のとれたつながりの鍵であることを、半農半 X から強調する^{注9)}。

このように田園回帰が広がるベトナム社会の中で半農半 X は一種のライフスタイルの哲学を提示しており、事実ベトナム語版半農半 X の副題には「田舎暮らしの新たな哲学 (Triết Lý Mới Về Cuộc Sống Điền Viên)」と付されている。そう考えるとこの半農半 X という哲学がベトナム農村でどのように受容され、広がりつつあるのか実証的な議論が求められる。この点の議論は別稿に譲ることとなるが、その際には、II 章の 4 でも言及された、ベトナムの地域づくりの現場でも耳にすることがある「あるもの探し」という地元学の視点が重要である。加えて、半農半 X のベトナム語版の副題において統計的に抽出可能な Nông thôn (農村)^{注10)}ではなく Điền Viên (田園) という地域概念を用いる。すなわち、生活様式が投影された景観という要素が含まれる「田園」という地域概念の精緻化の視点も併せて求められる。

謝辞

本稿は科学研究費補助金 (国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 A)) 「過疎発現下のモンスーンアジア農村におけるネオ内発的発展の可能性 (研究課題:18KK0344・代表者:筒井一伸)」による研究成果の一部である。「半農半 X」の提唱者である塩見直紀氏にはベトナム語版に関する情報の提供をはじめ様々な面でご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。なお本稿のベトナム語タイトル等は、Tsutsui Kazunobu, Nguyễn Thị Huyền, Huỳnh Thị Ánh Phương, Hoàng Dũng Hà, Trần Thị Tuyền, Nguyễn Văn Chung, Nguyễn Xuân Hồng, Bùi Thị Thu, Đỗ Thị Việt Hương (2024):

“Sống bán nông bán X” - Góc nhìn từ các nhà nghiên cứu nông thôn Việt Nam, Tạp chí Nghiên cứu vùng (Tạp chí của khoa Khoa học vùng, Đại học Tottori), 21-2. である。

注

- 1 例えば島根県では2012年度から「半農半 X 支援事業」を展開している。
- 2 本稿では『半農半 X という生き方』を記した塩見直紀氏を著者、本稿の書き手を筆者とする。
- 3 Bỏ phố về quê は直訳すると「街を捨てて田舎へ帰る」であり離都向村となるが、本稿では日本国内の議論との関係も踏まえて「田園回帰」の訳語を充てる。
- 4 ベトナム人の平均寿命は約74歳であるが、健康寿命は約64歳となっている。詳しくはJETRO「海外発トレンドレポート:ベトナムの高齢者介護用品・サービス市場調査(2023年10月30日)」を参照。
<https://www.jetro.go.jp/biz/trendreports/2023/d50d0efb11615b8f.html> (2024年9月22日最終確認)
- 5 以下の URL を参照。
<https://kilala.vn/emagazine/satoyama-khi-nguoi-nhat-song-hoa-hop-voi-thien-nhien.html> (2024年9月22日最終確認)
- 6 以下の URL を参照。
<https://twinbeansfarm.com/ban-nong-trai-ban-giac-mo/>
(2024年9月22日最終確認)
なお Twin Beans Farm はベトナム中部高原地域のラムドン省ラックズオン県ダサー行政村 (xã Đa Sar, huyện Lạc Dương, tỉnh Lâm Đồng) に所在しており、その紹介文章には次のように記されている。「塩見直紀氏が最初に提唱した「半農半 X」というライフスタイルについて読んだが、これこそが私たちがツインビーンズ農園を設立する際に追求したライフスタイルである」。
- 7 Bỏ phố về rừng は直訳すると「街を捨てて森へ帰る」であり「田園回帰」の意味とおおむね一致するが、Bỏ phố về quê と区別をするため「離都向森」の訳語を充てる。
- 8 ベトナム農業農村発展協会 (Tổng hội Nông nghiệp và Phát triển Nông thôn Việt Nam) に掲載された以下の URL の記事を参照。
<https://nongthonviet.com.vn/song-ban-nong-ban-x-xu-huong-moi-cua-the-gioi-hien-dai.ngn> (2024年9月22日最終確認)
- 9 半農半 X 的生活を過ごすトゥイ ゴー (Thúy Ngô) 氏のウェブサイトによる。以下の記事を参照。
<https://www.thuygarden.com/song-ban-nong-ban-x-triet-ly-moi-ve-cuoc-song-dien-vien> (2024年9月22日最終確認)

- 10 例えばベトナム政府が発行する『ベトナム統計年鑑 (Niên giám Thống kê)』では人口を都市人口と農村人口とに分けるなど、「農村」は統計的に把握可能である。

文献

- 稲垣照哉 (2023) : 半農半 X で農村のにぎわいは取り戻せるか, 季刊地域, 53, 62-65.
- 神田嘉延 (2015) : ベトナム北部ナムディン省の新農村建設と公民館, 鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要, 5, 143-169.
- 小林千夏 (2004) : ブックガイド・塩見直紀著『半農半 X という生き方』, 農業と経済, 70 (3), 95.
- 塩見直紀 (2003) : 『半農半 X という生き方』ソニー・マガジズ.
- 筒井一伸・ギエム トゥ ミン ハン・ブイ ティ トゥ・ド ティ ヴィエト フオン (2020) : ベトナムにおける「新農村建設」の動向と農村地域の類型化—トゥアティエンフエ省を事例に—, 地域学論集, 17 (2), 55-63.
- 濱田健司 (2007) : ブックガイド・塩見直紀著『半農半 X という生き方—実践編』, 農業と経済, 73 (2), 87.
- Shiomi Naoki, Regen (訳) (2022): “Sống Bán Nông Bán X - Triết lý mới về Cuộc sống điền viên (「半農半 X」という生き方—田園生活に関する新しい哲学)”, Nhà Xuất Bản Dân Trí.
- Tsutsui Kazunobu, Đỗ Thị Việt Hương, Bùi Thị Thu (2024) : Xu hướng "DEN'EN KAIKI - BỎ PHỐ VỀ QUÊ" trong Phát triển cộng đồng (地域づくりにおける田園回帰傾向), Kỷ yếu Hội nghị khoa học Địa Lý toàn quốc lần thứ 14 (第14回ベトナム地理学会議論文集), 383-390.

地域学論集

鳥取大学地域学部紀要

第21卷 第2号
令和6年12月



鳥取大学地域学部

REGIONAL STUDIES

**TOTTORI UNIVERSITY
JOURNAL OF THE FACULTY OF
REGIONAL SCIENCES**

Vol.21 No.2
December 2024



**THE FACULTY OF
REGIONAL SCIENCES
TOTTORI UNIVERSITY
JAPAN**